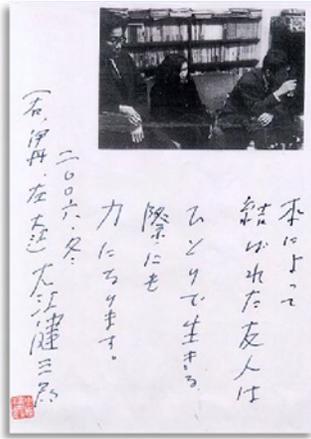


大江健三郎  
ファンクラブ通信





## 創刊にあたって

今年から、大江健三郎ファンクラブの有志がこの「通信」を作っていくことになりました。本誌は、大江文学を通じてつながる私たちの活動の「しるし」であり、また、大江さんに向けてこれから書きつづけていくであろう「手紙」でもあります。1冊を製本して大江さんにお贈りするほか、インターネットで公開し、幅広い範囲の方々に読んでいただけるようにする予定です。本誌を目にする皆さんに、少しでも楽しみや喜びがお届けできれば幸いです。

大江健三郎ファンクラブ代表・いとうくにお

## もくじ

3 フォト・エッセイ:大江文学を歩く(東京篇)/yoshimi

8 座談会:大江文学の中の女性

30 読者は語る

ジャズ、文学、革命/金田善裕

「洪水はわが魂に及び」/中村順子

私という大江読者の作り方/タカコ

32 コラム:大江さんと哲学/HAL

33 私の愛する大江作品

小林由紀/加藤佑子/印南直樹/チャイ/松永 節/じん/HAL/いとうくにお  
ちやまん/榎本里司/yoshimi

37 ファンクラブ活動報告/いとうくにお

40 編集後記





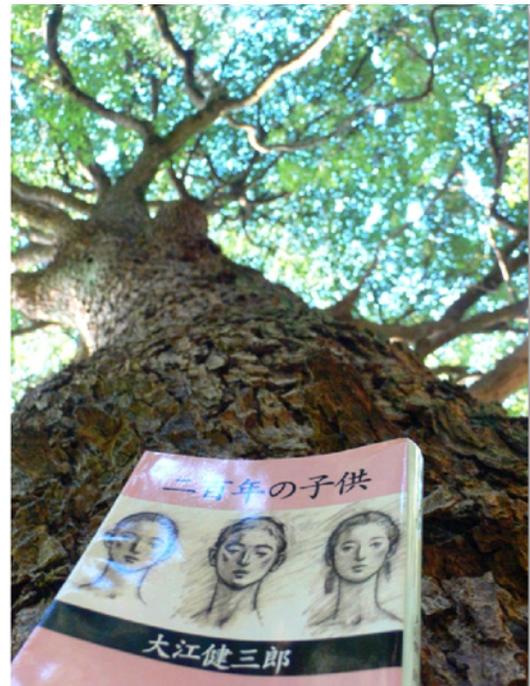
心地良い秋の風に誘われて「大江文学東京散歩」にでかけてみることにした。「yoshimi の千年スダジイ」のあるお気に入りの場所からスタートしよう！

text & photo by yoshimi

### 千年スダジイのある森

「二百年の子供」に書かれた森の家はきっとこんな場所にあるのだろう、樹木の鼓動や草花の呼吸が聞こえてくる静かで暖かい森でしばらく過ごす。木陰から犬のベーコンが飛び出してくさそうな錯覚を覚える。

「千年スダジイ」のムロに入り、「夢を見る人のタイムマシン」に乗り込んだ。



## 東京大学赤門



赤門は当時東京医学校(現東京大学医学部)が本郷に移った明治 9 年より他の学部が来るまでの 8 年間、医学部の門として使われていた。

事実上のデビュー作といえる「死者の奢り」も5月祭受賞の「奇妙な仕事」も付属病院、医学部講堂地下とこの赤門をくぐっての場所が舞台となっている。2 作品とも徒労に終わって報酬を得られない空しい労働の話だが、大学生という限定された時代性のリアリティが印象深い。この時期大江さんも「僕」も女子大生も何度もここ赤門を通ったことだろう。

## 日劇跡の有楽町マリオン



日劇は昭和 8 年に竣工され、戦時中の空襲による被災や終戦後の占領軍による接収も免れ、半世紀近くにわたって日本芸能界のひとつのステイタスシンボルとして存在した。

昭和 56 年再開発により解体し跡地には有楽

町センタービル(有楽町マリオン)が建てられた。

「四万年前のタチアオイ」でタカチャンは「僕」に日劇正面で会いたいと言ってきた。それは映画と実演で演じられていた女優Y・S の歌うひとつの歌を聴かせるためだった。タカチャンの“ここには希望が歌われているよKちゃん”“またいじけている！元気をだして、やってみようよ！”と励ますこの言葉に「僕」と共に私も何度も勇気づけられている。

## 有楽町ガード下



日劇で観劇した後、タカチャンは「僕」にはなじみの無い有楽町ガード下の一杯飲み屋に導き酒とホルモン焼きを注文した。この場所は今も陽の高いうちからコップ酒を酌み交わすおじさん達の憩いの社交場のようなのである。そしてノスタルジックな雰囲気若いカップルや外国人にも受けるのか、雑多な人間模様が見られる不思議な都会の一角になっている。

### 数寄屋橋公園



「人生の親戚」で僕が韓国の詩人の支援の為に  
行なったハンガーストライキでテントを張った  
場所は、晴海通りに面してビルと高速道路の  
谷間にあるこの小さな公園だった。  
まり恵さんもヴォランティアとして参加してい  
る。テントの周辺で彼女は女性らしい華やぎを  
持った働き手であった。ここは数寄屋橋が埋め  
立てられた跡地の公園で、通りに面して「数寄  
屋橋此処にありき」と刻まれた菊田一夫の碑や  
岡本太郎の作品もある。

### 地下鉄国会議事堂前



「性的人間」のJと大柄な老人は混雑した車両  
が国会議事堂前駅を過ぎた直後、トレンチコ  
ートを着た少年が痴漢行為に走るのを目撃す  
る。痴漢少年を救い共に「舗道上の友人」となるが、  
後日少年は線路に落ちて死んでしまう。現在  
の地下鉄ホームには防犯用カメラも置かれて  
治安面の強化がされてはいるが痴漢行為は減  
ってはいない、また痴漢冤罪事件も多発してい  
る。落下防止用の柵は今ではほとんどの地下  
鉄ホームに設置されている。

### 新宿高層ビル街

「母様、この人らはな、ずっと先の  
世の中から来た“童子”なのやよ！」  
病床に伏したメイスケさんが「仲間  
に母親を馬に乗せてきてもらうた。  
あんたらを母様にゆっくり見てもら  
おうと思うて・・・」と語る「二百年の  
子供」のこの場面は何度読んでも  
感動する大好きなシーンだ。舟越  
さんの描いた挿絵の原画には右上  
の遥かな山並みのように見える場  
所に、ここ新宿高層ビル街が描か  
れている。  
現在の新宿にはさらに新たな高層  
ビルが建てられた。「新しく産ん  
でもらったメイスケさん」あなたはこ  
の景色をもう見たのだろうか？



## 2003年の舟越桂氏のアトリエ



（写真：舟越桂「遠くからの声」より）

「二百年の子供」の挿絵が生まれたのは舟越さんの物置を改造して作られたこのアトリエだ。描かれた挿絵によってメイスケさんの姿は生き生きと私の中に入ってきた。

「粗い毛が下に向いて生えた固そうな皮のハーフコートと感じられるものを着ている、その下はモンペに似たパンツ。肩まで垂れた髪を、青い玉のついたバンダナでとめている・・・」

実際の絵は脇にある椅子と比べてわかるようにかなりの大きさだ。さらに壁の上部には『「伝える言葉」プラス』の表紙を飾った「夜は夜に」の力強いドローイングが見える。彫刻に使う楠の香りが漂う居心地のよい空間でしばし遊ぶ。

## ルルドの洞窟

カテドラル大聖堂の敷地内にある「ルルドの MARIA 像」。フランスのルルドの洞窟とまったく同じサイズで明治 44 年にフランス人宣教師によって作られた。

フランスのルルドの泉にはここに聖母 MARIA が現れ、聖水によって病が治ったとされており、奇跡の治癒を体現するため毎年数千人が訪れるという。後に道夫くんが事故によって車椅子姿になることや、メキシコで「聖女」に到達するまり恵さんを暗示するような場所でもある。

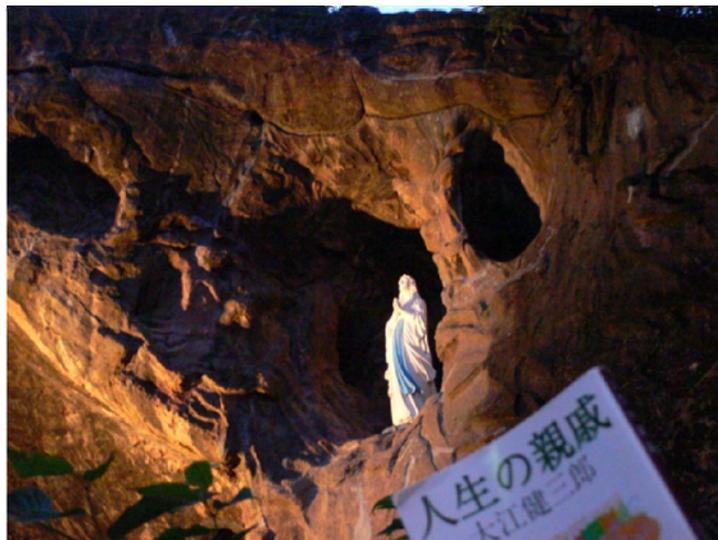
## 東京カテドラル聖マリア大聖堂



「人生の親戚」で「僕」とまり恵さんが初めて出会ったのは市ヶ谷の高台にあるカテドラルで行なわれたドイツのオルガン奏者が指揮するバッハ「マタイ受難曲」での演奏会だった。

（大）司教が、自分の教区内にいる信徒を教え、導き、司式するための“着座椅子”をギリシャ語で《カテドラ》といい司教座のある教会を“カテドラル”と言う。

いわば教区の〈母教会〉といえるもので、ここカテドラル大聖堂は大戦で全焼の後、昭和 39 年に丹下健三の設計で建てられ上空から見ると大きな十字架型になった斬新なデザインは建物全体が「祈り」という恩寵に包まれているかのようだ。



## 最高裁判所



散歩の終わりにここはどうしても訪れなければならない場所、蘭学者渡辺崋山誕生の地でもあり菊池一雄作「平和の群像」が建つ三宅坂の小公園から最高裁判所を望む場所だ。少数の心無い人達によって「沖縄ノート」は闘争の道具にされ最高裁まで上告されている。私も支援会に入って勉強会を重ねるうちに大きな組織が裏にあり、単純な訴訟ではなかった事が理解できたが、こんな事に大江さんが巻き込まれ心身を煩わされる事態になっている事

に心が痛んだ。

最高裁で再び勝訴の判断が下されるのは確信しているが、「沖縄ノート」に記されている史実はこれからも日本の課題として未来の為に私達はきちんと向き合っていかなければならないと思う。

## そして森に帰る——都内某所

「シイの木の神様、私を帰してください」と祈ると「夢を見る人のタイムマシン」は無事にスタートした森に戻って来た。ほんの数分の東京散歩だった気もするし、何時間も掛かったような疲労感もある。小説に書かれた「その場所」に行ってみると、私自身もその物語の中に入り込み登場人物のひとりとなって彼らと有意義で貴重な時間を共有する事ができた。

大江小説を愛する由縁はこのように想像力を豊かにしてもらえるところだ。

最後に、この散歩で私はほんとうの意味で「新しい人」になろうと改めて感じた、どんな時代になっても、「ピンチ」を乗り越えて・・・(終わり)



# 座談会：大江文学の中の女性

司会：つる

参加者：yoshimi、タカコ、真春、イオ、ちゃまん、いとう

日時：2009年12月19日13:00-16:00

会場：早稲田奉仕園セミナーハウス 102号室



## 女性描写のリアリティ



**つる**：今日はみなさんごろうさまで。ありがとうございます。今日は「大江さんの小説に登場する女性について」という

テーマで座談会をすることになりました。華麗に文学論を闘わせるとかじゃなく、大江ファンクラブってどういう人たちが集まってどんな感じでいつも読書会をしているのかなということが伝わるような話が出てきてほしいなと思うんです。だから、とくに構えないでいつもの読書会の感じで、脱線しても何でもいいですから、たくさんお話ししてほしいと思います。そういうことで今日はよろしく願います。

それで女性についてなんですけども、私の記憶によると、私が参加した最初の頃の読書会って、よく「大江さんは女性がわかってない」とか、大江さんの小説のなかで女性が納得のするようには女性というものを書けてないという感想が多かったと思うんですよね。

新作になればなるほどそういう感想は出てこなくなってきたとは思いますが、ほかに関心がいっているからなのか、大江さんの表現が変わってきたのかなって思うんですけど、そのへんはどなたかご意見お持ちの方はいますか。

**イオ**：だいたい女性は男性作家に対して一般的に「女性はかけないぜ」っていう。ステイブン・キングも昔からずっとそれ言われていて、「この人は書けない」と。書けるか書けないかと

いうのがひとつ男性作家に対する試金石というか評価みたいなものになっている。絶対言われるんですよ、女性陣からは「女性書けてない」というのが。

逆に、「この人うまいね」っていう人、いる？「これは完全、納得いくぜ」って、渡辺淳一かよ、みたいな。(笑)

じゃあ誰だよっていうと。女性は納得しないでしょ？

**いとう**：一般的にそう言われるとして、実際、自分たちがどう感じているかというところはちょっと話したいですね。

**イオ**：うん、だから男性から見たら、つまり、いろんな女性がいて、一人の男性が対人関係をもって、いろんなコミュニケーションをとって、女性像を描くから、書けてない・書けてるといふふうに思わない。女性は自分がまずベースにあって、「女性が書けてる・書けてない」という判断をするから。男性からすると、あんまりその



視点はそもそも持たないんだよね。「この人、書けている」と言い切るだけの自信も男性にはないわけで。

何が最初ものたりなかったのかな、逆にいうと。最初の頃、読書会で「書けてないね」って言われるのは、「この作品のこれはちょっと変だぜ」っていうのがあったの？俺、あんまりそういうふうに思わなくて、「ああ、こういう女性がいるんだ、こういう女性がいるんだ」と。別に不満は持

## 座談会

たないわけよ。

**いとう:** 要するに、「こういう人がいる」と実際に思えるかどうか。「こんな女性、いない」と思えば、女性をわかっていないということになるんだと思うんですけども。

ただ、大江さんは男性だから、男性の視点で女性を見て描いているので、男性読者には違和感は少ないと思うんですよね。



**タカコ:** わたしは、別に「こんな人いるよね」という人は書かれてないと思うんですよね。経歴にしても、特殊な感じの人がいますよね。でも、その中で、ほかの細かい登場人物の中で、するどく、すごくするどく女性を見ていると思うんですよね。それが、すごくリアリティを感じなくても、本質を表現していると思って、いつも感心するんですよ。わりと好きなんです。皮肉を込めた書き方とかもすごくうまいあと、「いるよね、こういう嫌なおばさん」って。そういうところを突いてくのが、すごく好き。

**つる:** そうそう、だからあまり大江さんとは会いたくないような会いたくないような気がしますよ、わたし。(笑)

**タカコ:** 正確に言えないのが申し訳ないんだけど、えーと『さようなら、私の本よ!』でだったかな、四国の実業家の夫人みたいな人が…。

**ちゃまん:** そう、あれはすごくいやしかった!

**タカコ:** 「いやらしい、あの感じって、いるよねえ、あっちにもこっちにも」って思いながら。ああいう書き方がうまいあつて。

自分の身近なリアリティということでは、「この経歴の人がこんなふうに暮らしているかな」とか「この人、なんで食べていけるか」とか、そのリアリティは少ないかもしれないけど、本質を突きた

めには、そんな細かいことは別に小説としてはいいんじゃないかなと、わたしは思うんです。

**真春:** わたしは、大江さんがあんまり好意をもっていない女性に対しての表現がね、徹底していると思うんです。「しぼんだナツメのような肌」とか。



**タカコ:** ズズ黒いとかね。(笑)

**つる:** あはははは。

**真春:** そう、「やせて棒のよう」とか「冷蔵庫にしまい忘れて萎びたリンゴ」とか、すごい徹底して。その比喩が、可笑しいのね。面白いの。そこで一息つけるような感じがあるんです。

**タカコ:** いそじゃないですか、本当に、そういう感じの人が。(笑)

**いとう:** 男に対しても同じですよ。

**つる:** そうなんですよね。嫌いな人に対するのって、本当に、これでもかっていう、そこまでのう?っていうような書き方するじゃないですか。

## 芸者化

**タカコ:** すごく印象に残っている大江さんの話で、テレビに出られてたときだと思っただけども、ちょっとこう物を書く女性がテレビに登場すると芸者化するって。

**いとう:** 政治に入った女性の話じゃなかったでしたっけ。

**つる:** そうそう、それも言っていましたね。

**タカコ:** その芸者化っていうのが、すごくうまい

## 座談会

言いかただなあって。

**つる**: 男性社会の中に入ると、政治家も経営者もそうですけど、とたんに芸者化してしまうという。

**いとう**: 僕もそれはすごく納得がいきます。

**タカコ**: うちの母はふつうの妻で終わったんですけど、「わたしは昔ね、芸者になりたかった」っていうんですよ。それっていうのは、“名士を裏で牛耳る”みたいなことを言うんですよ。

**いとう**: そういう意味で、なりたかったんですか？



**タカコ**: そうなんですね。そういうのも面白かったんじゃないかって言われてすごいびっくりしたことがあるんですけども、そうい

う世界での女の地位ってのは、大江さんが思うアップスタンディングな女性とはまた違う世界で、女性の地位としてあると思うんですよ、いままでの日本で。お妾さんでも旦那さんが大物だったら、こっちも、みたいな、そういうのすごく嫌だけど、やっぱりある種、勲章みたいに思っている女性もたくさんいると思うんですよ。それが対極かなって思うんです。

**つる**: 大江さんのいう芸者化っていうのは、どっちかっていうと、朝やってるニュースショーにおける女性アナウンサーの感じかなってあたし思うんですけどね。一人男性がいて、それで何人も若い女性アナウンサーがいて、ご機嫌とるでもないけども…。

**いとう**: あれは芸者というよりマスコットですよ、アイドルというか。

**イオ**: 事業仕訳で活躍した蓮舂さん、あの人なんかああいう社会にポッと入ったときに、自分の

ポジションとして設定するひとつのイメージモデルみたいなのが、一言でいえば“芸者”ってなっちゃうんじゃないのかなあ。

**いとう**: 芸者化するとき僕も扇千景をまっさきに思い浮かべたんですけどね。

**yoshimi**: 政治家になったときの扇千景ですか？

**いとう**: うん、やっぱりああいう男社会の中で地位を得た人のひとつのタイプとしてああいうのってありますよね。なんていうのかなあ、まさに“芸者化”っていうのがぴったりの表現なんですけど。

**イオ**: なんか銀座のママっぼい？ なんかあっちの入っちゃうんだろうなあ。

**タカコ**: 土井たか子は芸者化してないですよえ。

**いとう**: そうですね。

**つる**: そうすると、芸者化っていうのはただ媚びるだけではなく、何があるんですか？ わたしはただ単に媚びてるっていうふう考えたんですけど。だから私は芸者化っていう表現がどうかなって前から思ってたんですけど。ただ媚びているだけじゃ芸者さんなんてやってけないしねって思ってた。(笑)

**イオ**: だから裏から牛耳る。男性で、社会的地位はあるけど微妙に自信のない人が銀座のクラブでママに相談してっていうのが昔はあって、じつは社会はそれで動いていたわけだからね。

**タカコ**: じつは立場はそこでは反対になってたり、ね。

**イオ**: 片方に銀座のママがあって、もう一方に、迷信かもしれないけど、占い師だよ。伊丹さんの映画に、なんかそういうのなかったっけか。

あれは違うか。わりと日本の政治家って、結局、裏から操られる。神秘主義的な方向から。最終的な判断って男性はもしかしたらどっかに何か求めてるときに、人がいっぱいいるところに自分と違う女性が一人でももぐりこんできたら、それをどんどん周りが要求するから、女性のほうもそれに応えてママ化しちゃう？ 巫女とかさ、そっちにいくんじゃないかね。

## 女性表現の変化



**yoshimi**: 大江さんの場合は身内にすばらしい女性がすぎますでしょうか？ お母さん、妹さん、奥様、娘さんもね。そういう人

っていつつも出てくるじゃないですか、小説のなかに。で、その人たちっていうのは、やっぱりある程度大江さんはその人を見て書いているわけですよ。

で、ほかの女性で、実際にはいないような人を書くときっていうのは、もう想像でしか書いてないと思うんですけども、そこにはいろんな人物設定とか性格設定とかなんでもありみたいな、さっきタカコさんのおっしゃった、こんな経歴のこんな人いないよねっていう人を入れてもオツケなわけじゃないですか。そのへんの、大江さんの身近にいるであろう女性たちと、その人との関わりあいというか、そういう関係性みたいなのは、すごく面白いなっていうふうに私はいつも思っているんですけども……。

**ちゃまん**: 最初の、つるさんのお話の、だんだん女性が描けてないっていう意見が少なくなってきた……



**つる**: 参加するメンバーが変わってきているからかもしれない、ただ単にね。

**ちゃまん**: うん、やっぱり、最初の、初期の、どっ

ちかっていうと想像力で書いていたような、そういう女性から、だんだん私小説的になってきて、いま yoshimi さんがいったような、奥さんとかお母さんとか娘さんとか、その辺のモデルが出始めてから変わってきたと言えるかな。

**つる**: 言えるかもしれない。だから初期の頃の大江さんの小説に出てくる女性って、若ければなんかとっても薄っぺらな感じだし、肉体が伴ってないような感じで……

**yoshimi**: あるいは肉体だけっていう感じですよ。

**つる**: ある程度、年配になるとそれが真逆みたいな感じになってるんじゃないかって、ふと思ったんですけど。それは『見るまえに跳べ』に出てくる、なんだっけ、とってもインテリジェントがあるんだけど、娼婦の人いましたよね。その人はまたすごい若い女の人と真逆で、すごい肉体を伴っているんだけど。

**いとう**: 良重？

**つる**: あ、良重！ で、そういうふうにつこう若い人はこう、ある程度、三十半ばだところみたいな、そういう感じがあって、どうなんだろう？ っていうふうにした人もいたのかなという思いもありますね。

**いとう**: 描かれている女性の年齢・年代によって、ということですね。

**つる**: でも、それも要するにその作品のなかで役割を与えられていることっていうふうには。たとえば、良重でしたら、娼婦という役割を与えられて、そのなかでいるような感じがどうしてもしてしまう。娼婦っていう実態というのはあまり感じられない、かな。

**イオ**: 初期の大江さんって、だいたい娼婦とか、私大生とかさ。江藤淳の言いかたをすると仮面劇的な、まずキャラがあって、娼婦なら娼婦で、

## 座談会

最初から最後までそれ演じてくださいよみたいな。私大生とかね。工員でもいいし、管理人でもいいんだけど、固有名が出てこないパターンだと、どうしても薄っぺらっちゃあ薄っぺらになるよね、ある意味で。

つるさんって、どのへんから、大江さんが女性を書くのがうまくなったぜって？

**つる:** いや、そんなにはあたしはこだわってこなかったと思うんですけどね。こういうものとして書いているんだろうなっていう理解ですから。で、やっぱりあの結婚して子供が生まれて作品が変わっていくなかで非常に裏付けていか肉付けていか、そういうものがある人間が増えてきたっていうか、登場するなっていうふうには思いますね。

で、女性の描き方で言うと、あたしが好きなのは、若い女性の群像みたいなのがけっこう好きですよ。いい描き方じゃないんですよ、必ずしも。でもそれが非常に、残るなあっていうか重要だなあって。

**タカコ:** それってもしかして『人生の親戚』？

**つる:** ああ、『人生の親戚』。あたしも『人生の親戚』が好きだから。

**タカコ:** ジーパンの足！

**つる:** そう、ジーパンの足。下半身が。それが目に見えるようで。あたし好きでしたね、すごく。それで重要なんですよ。

**真春:** 『人生の親戚』は、大江さんが書く女性で一番好きだなあ、わたし。

**つる:** 主人公がですか？

**真春:** まり恵さんが。

**タカコ:** いまのおっしゃたところは、これですよ。わたしもこれもってきたんですよ。「シンプルなブラウスの衿もとや、袖からのぞいている皮膚

は、日焼けしすぎてカサカサし、若い娘らしくない労働の痕を示している。しかし彼女も仲間たちも、ジーパンをきつくふくらませている尻と太腿など圧倒的な量感で、とくにそれを鼻さきにつきつけられた妻とまり恵さんは、辟易するより眼を奪われる様子」こんなふうに若い女性の姿を描写するって……。

**真春:** これをまり恵さんが見てるっていうのがね。

**つる:** 目に浮かぶよう。

**タカコ:** そのきついジーパンっていうのがよくわかるし、うまいなあ。そんなふうに見てるって思ったら、会うの怖いですよ。

**つる:** あはははは。

**タカコ:** うまいなあって思って。これ、十分女性を描いていると思うんですけど。

**いとう:** でも、それはわりと即物的なっていうか視覚的な観察ですよ。

**タカコ:** 内面的なことではないけど、でも、内面的なことも感じられるような描写をするような気がする。



**イオ:** あの文章だけで、だいたいやってきた女性のキャラだとかなんだとか、わかる。だって、まり恵さんも、受付自体を断られるけど、そのあと素晴らしい人ですねって言われるタイプの、まさに活動的な、で、日焼けしちゃうわけじゃん、仕事しているかな。なんか、日常生活で、たぶんこういう人だろうっていうことが、ちょっとした文章で伝わってくるんじゃないか。

## 座談会

**タカコ:**遊んでいるような女の子じゃないということが、はっきりとそれだけで表現されているって、すごいなあ。

**真春:**ずっと、一番最初にキーコっていう名前で出てきた人が、『個人的な体験』の火見子だったり。なんかおんなじかなっていう感じが。

**イオ:**ひとつ、大江さんのなかにあるのかなあ。

**yoshimi:**あるんじゃないんですかね。同じ人のイメージが、タカチャンとか。

**いとう:**完全に同じじゃなくても、共通の要素を持つ人として。

**タカコ:**ずれを含む繰り返し。

**yoshimi:**それは男性にしても同じじゃないですか。

**タカコ:**でも、そうやって同じ繰り返しのようになっていわれるけど、でもやっぱり、その作品その作品でわたしは描きたいことをその人として描いているから、繰り返して何が悪いんだって思っちゃうんですよね。

**真春:**でも、大江さんもですけど、たぶんそうだと思うんですけど、アサさんって言われたら必ず言いかえますよね。男二人がデレデレしてたって、なんとか先生。そしたら、それは年齢が近い親しさだったんじゃないかって、言いかえますよね。ああいうところがときどき大江さんの本には出てくるような気がするんですよね。

**タカコ:**批判のさせかたがすごく上手ですよね。

**yoshimi:**アサさんって、全然変わらないですよ。

**タカコ:**変わらないですね。

**yoshimi:** (『水死』を指しつつ) これにもいっぱ

い出てくるんですけど、変わらないんですよね。変わらないなあ。

## 大江さんと女性たち



**ちゃまん:**実際に妹さんもああいう感じなんですかね。

**つる:**どうなんですかね。

**真春:**でもこんなふうにしっかりした女の人、いるような気がしますよね。

**つる:**なんかでも大江さんの周りには、本当かどうかはともかくとして、全部しっかりした人ですよ。

**イオ:**大江さんがそれを集めている？

**yoshimi:**『作家自身を語る』を読んでみたんですけど、女性に関するところで、ちゃんとした恋愛をしていないって書いているんですよ、大江さんはね。

**つる:**ご本人が？

**yoshimi:**うん、ご本人が言ってて。妻とか妹とか母とか、いつも彼女らに庇護される、世話をしてもらって、まあ、子供みたいなものとして暮らしてきたのが私の人生でしたって言っているんですよ。

**真春:**ほんとうかもしれない。

**タカコ:**そうだと思う。

**yoshimi:**だから、なんていうんでしょうね、男女間のバチバチいうような経験が、刃傷沙汰みたいな、そんなような経験が大江さんにはたぶんないんじゃないかって思うんですよね。

**つる:**吉行淳之介とは違う。(笑)わたし、吉行淳之介って女の人、よく書けているような気がするけど。でも、それも幅は狭いということはあるんだけど。

**タカコ:**だけど、経験すれば豊かになるってことでは全くないですよ。一人の人でもすべてを経験できる人もいれば、何十人つきあっても薄い経験しかない人もいるから。大江さんはこれだけ経験してないなかで、これだけの女性、肉体的なことも含め、よく書けるし、やっぱり真実を見る目がある。

## 火見子論

**真春:**男の人からみたら、どうなんですか、大江さんの女性は。



**いとう:**いまタカコさんがいったことでいうと、やっぱりものすごい観察眼っていうのが、それは作家の観察眼というのは本当

にするどいなと思うんですよね。ある場面見ただけで、その女性の本質的なものを感じとったりとか。そしてそれをよくわかるように特徴をとらえて表現する、そういう力は本当に途方もないものがあると思うんですけどね。

で、その大江さんの女性観ということでいうと、いま yoshimi さんが、周りの女性たちに庇護されてきたということをお話されましたけど、小説のなかで出てくる家族たちというのはやっぱりそれをもうちょっと理想化したというか純粋化したよう

な形で書いているのかなという気がしますけどね。だから、小説のなかの「僕」という存在も、アサさんとかお母さんとか奥さんに守られてきているという感じはします。

そういう女性のタイプと別にあるのが、情婦的な女性であったりとか、情婦のと片づけられないタイプもいると思うんですけど、男性読者としては、そういう自分を庇護する周りの女性たちよりは情婦的女性たちだったり、ちょっと危険な女性だったり、そういう人に魅力を感じますね。まり恵さんであるとか『個人的な体験』の火見子であるとかね。

前に『個人的な体験』の読書会をやったことがあるんですけど、T さんという方が司会やってくれて、彼が火見子ってあまりにも都合よすぎる存在なんじゃないかって、男から見たらありがたいけども、そんな都合のいい存在として書かれていて、女性から見てどうなの？っていう問いかけをしてたんですけど、女性の参加者からは、そんな違和感はないっていう声が多かったように思うんですよね。そういうことも改めて訊いてみたかったなと思っているんですけどね。

別にずっと付き合っているわけじゃないのに主人公の僕が苦しいときに逃げ込んでいくと、受け入れて、再生させてくれて、すべてを受け入れて、っていうような存在じゃないですか。

**タカコ:**まして、最初の相手だったということでしたよね。

**いとう:**そうでしたっけ。

**タカコ:**強姦まがい、いや強姦じゃないけど。彼女はそれが初めてだったんですよ。

**いとう:**それが男性の目からすれば、すごくある種、理想的な女性のひとつだと思うんですよね。

**一同:**(苦笑)

**いとう:**まあ男性と一般化しないで僕といってもいいですが。(笑)

**つる:** あはははは。

**いとう:** 要は、すべて受け入れてくれて、しかも、ちゃんと内容のある人間というか、人格がある、自立した女性なわけじゃないですか。そういう人が自分を受け入れてくれるっていうのは。

**真春:** わたしはあのとき、あれって思ったのはね、そういうふうにして奥さんのところに帰るじゃないですか。そうすると奥さんが、あんた、そんなふうにして再生したのね、みたいな言いかたで、それをすつと受け入れるというのは、「あれ、そうなのかなあ、よその人は」って。(笑)

**いとう:** あれも都合のいい描き方という感じはしますけどね。

**タカコ:** ただ、火見子の存在は、具体的に現実と考えたら、そうすんなり受け入れられないだろうと思うけど、あの「装置」がないと、再生、魂が生きていこうと前向きにということに至るために必要なかけだから、実際の現実の夫婦の関係はどうなのということは、いいんじゃないかなと思うんですよね、別にリアリティがなくても。

**いとう:** でもそこに何かしらリアリティがないと、小説として成り立たないと思うんですよね。火見子みたいな人が実際にいると、少なくとも読んでいる間、ある程度納得できないと。

**タカコ:** 読んで違和感はないですよ。

**いとう:** だからそれは男から見た女性だから、そういうこともあるかなあっと。そのまんまの人はいなくても、あるかもしれないなあという感じで思うわけですよ。

**真春:** 苦しいときに癒してくれるのね。

**タカコ:** わたしは火見子の側から読んじゃうと、すごく難しい内面を抱えている、生い立ちから、火見子の人生をひとつ物語にしたら、そうとうな

ものが書けちゃうくらいの人だろうなって思うんです。危なさも含め。夜中に出てって一晩中走り回って帰ってくるなんてね、まったく普通じゃないです。でも、そこからもう1つ小説書いても面白いかもって、思うくらい、そういう人だから。

**いとう:** そういう人だから、受け入れるかもしれない？



**タカコ:** ああいうことになるのも、そういう人ならあるかも、って思うんです。普通の女の人じゃないですよ。だから、相

当なことがあって、ああいう人になったんだろうって想像すると、火見子自体は自然だけど、真春さんがおっしゃった、奥さんが納得したかどうかになったら、確かにちょっとリアリティに欠けているかも。

**真春:** 大江さんは小説として書かれているから、ここでゴネたら…(笑)

**つる:** そうね、そこで夫婦のごたごたを書くと、違う小説になってしまうということはありますからね。(笑)

**いとう:** だから、少なくとも描き方として、奥さんがそうやって受け入れる、「あ、そういう人なんだな」って思えるような書き方じゃないと小説として破たんしてしまうと思うんですよね。そこはある程度、納得できるような表現になっていると思うんですよ。

**タカコ:** わたしもなってると思います。火見子がそういう描かれかたをしているから、納得できる。

**ちゃまん:** なんか自己犠牲的な生き方をする女性のタイプ、たとえば『罪と罰』の娼婦みたいなのがいて…

yoshimi:ソーニャ?

**ちゃまん:**ソーニャのタイプがいて、火見子も、僕はすごくそんな感じがしたんですけど。たとえばものすごく頭がよくて、研究とか自分の没頭するものをもっているそういう女性というのは、あんまり実利的なところで駆け引きとか、そういうものにはこだわらないとか、もっと越えたところで生きているから、そんな小さなことなんか許すとか、そういう感じがしたんですけどね。



**いとう:**クリスマスにプレゼントをねだったりしないとかね。(笑)

### 庇護者としての女性たち

**つる:**ちゃまんさんは大江さんのように周囲の女性に庇護されて生きるとかっていうのはどうですか?

**ちゃまん:**う〜ん、結果的には大なり小なり、みんな男性っていうのはそういうところがあるような気がしますね。

**つる:**ご自身も含めみなさん優しい奥さんに恵まれていらっしゃるから。(笑)

**ちゃまん:**いや、別に優しくない……

**つる:**別に優しくない? そんな事いわれると私すごい反省します。(笑)

**タカコ:**私の周りには庇護されたい男性ばかりだ! 見渡すと。(笑) 本質的にそうなのかな(笑)

**いとう:**それは庇護してくれそうな女性の近くに庇護されたい男性が集まると。磁石のSとNの

関係みたいに。

**タカコ:**何回繰り返しても同じ撒を踏むという。(笑)

**ちゃまん:**どうしても男性は子どもっぽいとか、女性からみると抜けているとか、そういうところがあって、怒られながらもカヴァーしてもらっているという感じはしますけどね。(笑)

**つる:**ちょっと垣間見ました。(笑)

**イオ:**全部娘さんで女性ばかりのところへ一人男性が入ると何だかんだで女性的な……、でも大江さんちはそうでもないのか。

**yoshimi:**うん、息子さん二人ですもんね。

**イオ:**大江さん自身もお兄さんの方が多いいんぢよね。

**yoshimi:**そうですね。

**いとう:**でもあんまり出てこないですよ、お兄さんは。大江さん自身が庇護されるタイプだから、女性の家族との関係も蜜になってくるのかも。

**イオ:**お兄さんも弟さんもどっちかという社会性があって自立するタイプで、大江さんだけがそういう能力がちょっと違うから、大江さん自身のところに集中して形成されてるから、対人関係とか女性関係がずっとそれできてるんですかね。あの、セザンヌっているじゃないですか。

**つる:**画家の?

**イオ:**あの人も全然そっちがダメ系で。

**つる:**社会性って何がですか?(笑)

**イオ:**小学校くらいの頃から妹さん抜きで成立し

## 座談会

ない。何でもかんでもそっちは妹さん任せで、セザンヌ自身も葛藤があるんだけど全然能力がないから全部助けられちゃうんだって、妹さんに。お前なんかひとひねりでつぶせるぞとかいいながら全部任せちゃうらしいの。結局何でかそっちが全然ダメ。一切ダメでしょ、あの人。

**つる:** まあ絵描きさんってそんなに世渡り上手な人はほとんどいないですよ。だいたい実生活だめ。

**タカコ:** それでいいと思う。絵だけ描いていれば。

**イオ:** 大江さんなんかそんな感じの、芸術家？どっかある部分が欠落していて苦手。

**タカコ:**すごい特別な子供だったって感じですよ。

**真春:** 光さんが障害を持って生まれた事で大江さん自身も変わったって書いてられましたよね。

**タカコ:** 実際的な事をいうと、引き受けざるを得なかった。

**真春:** そうですよ。

**タカコ:** それが大きいと思います。

**いとう:** 世代的な古さというか戦前生まれの人の女性観っていうのはよく感じるんですよ。

**タカコ:** 大江さんに？

**いとう:** 大江さんに。男はドッカと座っていてあとは女の人がお茶出してくれたり周りのことを何でもやってくれる中に安住できる古いタイプの女性観・男性観があると思う。小説の中でもそういう場面が出てくると、今はこういう時代じゃないよなあって感じが僕はする。

**つる:** なるほどね。

**タカコ:** 書かれてる時代を考えたならそれが自然。

**いとう:** 今の話でも。例えば『水死』でも僕はそう思いましたけど。

**タカコ:** 朝ご飯作ってくれますもんね。

**いとう:** ええ、最初のところしか読んでないんですけど、それを当然の事として受け入れてるところが。

**イオ:** 料理を女性に作らせること？ でも現実には作っているでしょ？

**タカコ:** 大江さんは自分でやるみたいですよ？

**つる:** たまにでしょ！！ 特別！ 特別！

**いとう:** オックステイルシチューとか、スポンのスープとか。

**ちやまん:** でも、そのへんも若いときの小説の方が旧態依然たる女性とかあまり出てなかったような。年とともに顕在化しているような気がしますよね。

**つる:** そうですね。若い時はすべてにわたってあまり現実感がない小説だったと思うんです。

**タカコ:** 逆に今書かれてるもののなかでそう感じられるのは、大江さんの実生活に沿って自然に描かれているんですよ。だから古いタイプの男性であることは間違いないですよ。



**真春:** 大江さんの家族は、女の人ほとんどにみんないい人なのね。困った女性って出てきませんよね。奥さんでもお母さんでも娘さんでもみんないい人で、問題ないよう

## 座談会

な感じの人ばかりで、いいなと思いましたけど。

**つる:** 母親としてみると(子を)全然怒ったことないような…。

**真春:** あれはほんとうに不思議ですよ。

**つる:** 私もちよつとそれは信じられなくて。大江さんも見てないだけだと思いたいですけど。でも本当にそうなのかどうなのかと。

**yoshimi:** 大江さんのお母さんが？ 奥さんが？

**真春:** あの奥さんが子どもに怒ったことがないという、声を荒げたことがないという……私はそれに引き換え、というのもあるけど、すごい人だな一と思う。

**つる:** それもあり得るのかどうか、子どもを育てていくうえで。子どもが小さいときとか、言うこと聞かなかつたり、やっちゃいけないって約束したこと破つたりしたらまず荒げますね、私は。

**ちゃまん:** ゆかりさんってヒステリーとか起こさなそう。

**つる:** うん、おっとりしてていつも……

**真春:** すごいな一って思うねえ。大江さんそれだけでも幸せな人だな一と感じますよね。

**つる:** 周囲の人がみんな大江さんを大切に、配慮して生活していらっしゃるんじゃないかなあと。ふつうの夫婦とはちょっと違うのかも。

### 才能に惚れる？

**いとう:** そうはいつでも奥さんだったら夫としての役割を求めるんじゃないですか。例えばタイガー・ウッズの奥さんだって(笑)タイガー・ウッズに夫としてのやるべきことを全部求めるわけで。

**つる:** 無闇とお金のないときに本買っちゃったりして、私だったら怒るけど。

**タカコ:** けっこう夫婦の間では辛辣にありますよね

**yoshimi:** チョコチョコつと出てきますね。このまままだうちの家計はどうなっちゃうんだろう、みたいな。

**タカコ:** 妻が怒ってますみたいなのは出てきますよね。それがタイガー・ウッズの奥さんみたいに怒るんじゃなく、ジワッとちゃんと怒りを伝えてらっしゃるんじゃないかと思えます。

**いとう:** どんな有名人でも、例えばロックスターでも、ビートルズのポール・マッカートニー夫婦とかも、夫婦としては対等ですよ。相手が社会的に特別な存在だからといっても夫婦としては対等にやってるんだなって。だからケンカもするし上手いかなければ別れるしと。そこは大江さんのところもそうだと思いますけど。だから大江さんが大切にされているとすれば奥さんが出来た人なんだろうなということだと思いますけどもね。

**yoshimi:** 才能にすごい惚れてるんじゃないですか。

**つる:** そりゃそうですね！

**いとう:** そういうことあるかなあ？

**つる:** ええっ～～ありますよ、ゼツタイに！ ゼツタイそうだと思うあたしは！

**yoshimi:** 私もそう思う。だから何かおかしくても許せる。

**いとう:** ポール・マッカートニーとかの例でも、才能といえはすごい才能あるわけだけど、大江さ

## 座談会

んもそう…。

**yoshimi:** 特出した才能ですよ！なまじっかな才能じゃなく。

**タカコ:** 女の人によると思う。

**つる:** そうそう、そうよね。「ポールにすごい才能あることは認めるけど、でも！私はこうありたい」みたいな、そういう人だっているわけ。

**タカコ:** そういう人じゃダメでしょう。「絶対自分だけをいつも見てて」という人は有名無名を問わずダメになるんじゃないかな。

**いとう:** いやあ僕は、そうじゃないと女の人を思ってたんですけどね。そうじゃないのかなあ。

**yoshimi:** それは女性によって違うんじゃないですか。

**イオ:** 松田聖子とかさ、自分の才能に尽くしてくれる男性がホントは欲しいんじゃないかな。そういうの逆にあり得ないじゃん、男性は。

**いとう:** いやいや、そんなことはないですよ。だって女性芸能人のマネージャーが結婚して尽くす、みたいな例もありますよね。サッチャーさんのダンナさんとかね。

**イオ:** あれも才能に惚れちゃって、いいよ俺はもう、みたいな。

**タカコ:** それはどっちにもある。別に才能に惚れただけではないと思いますよ。勿論違う意味での愛情みたいなものもねえ、あるし。才能に胡座をかいて冷たくするような人だったらダメだと思うけど。

**いとう:** う～ん、よく野球選手とかスポーツ選手の奥さんがダンナさんが活躍するために何でもやるっていうような、ちゃんと健康管理まで考えてそれが私の仕事だからみたいな奥さんがいる

じゃないですか。ああいうのが——随分話が脱線しちゃいますけど、僕はよく分からないなあと。つまり自分の人生を捨ててその相手に賭けるわけじゃないですか。

**つる:** シン？捨てるっていうのとは違うと思う、あたし。

**yoshimi:** いま良い例でいうと、鳩山夫人ですよ。

**いとう:** いや、あの人は自分の人生がしっかりあって…。

**yoshimi:** それと近くないですか？男性を社会的にも認められるようにするっていう、それをワタシがプロデュースしてるのヨって思えば、そのイチローの妻だろうと松井の奥さんだろうと、そういうプロだと。自分の人生を捨てて、というそういう意味合いではない。

**イオ:** 自分の人生を捨てることになっちゃってるよねえ？

**yoshimi:** 私がイチローを育てるのよみたいになれば別に捨ててるというような意味合いには取れない。

**タカコ:** ここにもものすごく意義を感じるっていう女の人もいます。

**yoshimi:** またそれが完璧にできたら、それはその女性のすごい達成感あると思う。

**タカコ:** だって目に見えて達成するでしょう！？野球だったら成績とか年俵とか。その快感はあるんじゃないですか。(笑)

**いとう:** でも自分じゃないわけですからねえ、その成功するのは。

**タカコ:** 同一、お母さんでも子どもに乗り移ったような人がいっぱいいるように、これは割と乗り

## 座談会

移りやすいんじゃないかと。

**イオ:**子どもには乗り移るお母ちゃん多いじゃない？

**タカコ:**夫に乗り移る人もいますよ。

**イオ:**だから結局天才児を育てようかっていう…

**いとう:**子どもの場合は、自分の血を継いでいるわけだから、それは分かるけど。

**タカコ:**夫に対してもそう思う人はいる。

**つる:**子どもがいなければ尚更そうかもね。

**いとう:**でも夫じゃあ自己実現にならないんじゃないかな。

**ちゃまん:**だから、夫が作品になるんじゃないですか。

**真春:**立派な作品になれば、だけど。(笑)

**イオ:**村上春樹の奥さんって、あんまオモテ出ないけど、多分ウラで(一同笑)村上は作品だけに思ってるのかも。ベーシックなイメージはだいたい全部奥さんだっていますよね。

**真春:**世の中ではとても認められて偉い人っていうけど、奥さんからみたらタダのもうね、だらしない男、みたいな、そういう人いますよね。

**タカコ:**そういうの、多々ありますよね。(笑)

**いとう:**じゃあ例えば才能に惚れて、この作家を自分がプロデュースする、成功させるっていう気持ちがあれば、相手の男性が放蕩の限りを尽くす(一同笑)火宅の人であっても良いわけですか、自分を離れなければ。

**タカコ:**それはその人の中の葛藤で何が勝つか

でやめるかどうかっていうのはあるんじゃないですか。いくら私だってここまでは許せないとかってなれば。あれはこっちにもメリットがあるわけだから、これぐらいは許そうって人もいると思うんです。バッチリいい人なんているわけがないんだから。

**つる:**作家としての才能はあるけどお勤めはできない、くらいならまだしも、女遊びまでするんじゃないアタシはイヤだけど、ってそういう感じかもね。それぐらいなら我慢しようとか。

**真春:**案外大江さんって、愛すべき男んじゃないかな、という気がする。女から見たとき。

**つる:**どういうところがでしょうか。

**真春:**ちょっと不器用そうな感じ。文学的な事は別にして、日常些細な事で奥さんに言われたらうまく反論も方便もできない、っていう。なんか、布団被っちゃう。

**一同:**(笑)

**真春:**案外、可愛らしいところがあるんじゃないかと。

## トリックスターとメイトリアーク



**タカコ:**話、大江さんに戻るんだけど(笑)、『M/Tと森のフシギの物語』でトリックスターとメイトリアークのことを読んだ時に、コレ

だ！私と夫はコレだあ！って思ったの。私はメイトリアークだし、彼はトリックスターで、なるほどそういうふうにはいるんだなって。

**いとう:**もうちょっと具体的にいうとどんな感じなんですか。

**タカコ:**メイスケさんとかね、動かす人っていうか

## 座談会

何かを起こっていか、そういう…

**yoshimi:** 壊す人とかも？

**タカコ:** そう、壊すのもあれば、作るのもありますよね、両方ありますよね。その脇に、ちょっと固めるっていうか、補助する。メイトリアークは女族長という訳でしたっけ、それがしっかりその人の付随する家庭を守ったり、他の事でって、役割をして。どっちも必要ですよ。どっちもないと色々な事って回っていかない。で、トリックスターはワァーっていいことしたりして、けどガンっといきなり牢屋とかそういうように失墜する風に書いてあったと思うんですけど—そういう風に失墜してないんですけど、夫はね(笑)

**yoshimi:** そういう感じなんですか、役割として。企画したりとか、仕事始めたりとか。

**タカコ:** 次々と色々、そういうタイプ。例えばさっき言ったメイトリアークがいつもただ支えるだけっていう訳ではなくて、トリックスターが色々な事をやっちゃってくれるおかげで、けして一人では経験できないいろいろな事に巻き込まれていく経験をして、成長もしていくし、酷い目にも遭うし、でもそこに……多分私って元々はキチツとした性格だったと思うんですよ。

**つる:** キチツとしてますよ！

**タカコ:** 見えるんです。そのギャップが激しいんです。キチツとお金も積み立てて計画立ててこうしよう、と計画したらやってきたタイプだと思うんだけど、全くそれが通じない相手と結婚しちゃったから、前の自分だったらけして破れない殻は否応なく破られてしまって、トリックスターのおかげで、すごく様々な経験を(笑)

**イオ:** 絶対自分じゃ行けない断崖絶壁に連れて行かれちゃったわけでしょう(笑)

**タカコ:** そう否応なく。そこで、まあ落ちないで

(笑) なんとか来てるけれども。だからそういう風な2つの役割が、妙にスッキリ納得した。



**真春:** 私の場合、それはきっと息子だと思います。私は田舎で生まれて、周りからみんなから保護されて、ずーっと来た保

護が父親から夫に移っただけの暮らしで。夫の両親も。

だけど息子が生まれて、人と変わった息子だったので、今までのようにいかなかったんですよ。すごく途惑いましたけど。すごくこだわる子で、人に会うと名前を聞いて歩くんですよ、小さい時、3つくらいの時。そうするとさっき言ったよ、とか言われるわけですよ。私はそれを答えてもらいたくて、いままで人にお愛想なんて言ったことないのに、本当にいつもすみません、申し訳ないですもう一回言って下さい、みたいな(笑)。そうやっていままで自分がしなかったことをしていかないと、暮らしができなかった。だから大江さんが、自分が変わった、っていうのも本当に分かりますよ。

**いとう:** 光さんの誕生で、変わったっていう事が。

**真春:** 光さんの音楽会の時に、大江さんが光さんをサポートして舞台の傍まで行ったんだけど、そのとき何だかとってもいい感じで、ああ、やっぱりひとつ何かを超えて繋がった親子だというような雰囲気がありましたね、とっても。あれはただ単に父親というより、なんかもっと違う絆があるという感じが、あのサポートの仕方としてね。あれはとってもすごくよく分かりました。だからね、うちの息子がね、普通の子だったらとっくに離婚されて返されてる、みたいによく言われるんだけど。子どもが変わった子だったから、自分を—まあ色々な事をね、我慢したり勉強したりしてきたから、こういう風に出てこられるようになった、と思います。なかなか一人で出歩くということはできなかったんですよ。最初のころは亭

主が付き添って読書会来たりね(笑)。

**いとう:** そうですね。

**つる:** 病気がさった後だったからですよ。

**真春:** そうですね。



**つる:** 真春さんは、お子さんの事があり、それからご自身の病気の事もあり、色々苦しんだり悩まれたりしたなかで、大江さ

んの作品というものがすごく大きな意味を持っていらっしゃるじゃないですか。そういう読み方っていうのかな、私自身も真春さんを見て、とっても感じる場所があるし、すごく大切に大江さんの小説をなさってらっしゃいますよね。どういところが好きですか？ すごく大雑把な質問で申し訳ないですけど。

**真春:** “共生”ってよく言いますよね大江さんが。障害児を持った家庭で共に生きるっていうことは、本当に難しいです。できないです。息子の下に妹がいましたけど、わたしが上の子に掛かりきりだと下の子は放っておかれるようになるので、どうしたらいいか分からないんですよ。それで上の子をおぶって、下の子を歩かせて、そんな感じでしたから。で、ずっと考えて、娘を自分の味方にしようと思って、娘と私と一緒に兄を面倒みるというような体制を作ったら、わりかしそれで上手く行ったんですけど、光さんの妹さんが、やっぱりどっか子どもらしくないところがあるように、普通の子どもとはちょっと違う育ち方ですよ。うちの娘なんかも。

**つる:** 本当はもっとお母さんに甘えたいところを、お母さんと同じ役割を自分は担っているんだからというところで納得をするわけですよ。

**真春:** 本当に泣いたんだけど、誕生日のプレゼントは何がいい？ というと、一日中おんぶしてほ

しいっていうんです。そういうのが一番辛いですね。

でも幸いうちは、娘の夫は何でも大丈夫の人で、呑気で、だからその人と暮らして 5 年かかって直してもらったって言ってましたね、娘は。で 6 年目に子どもを産んだんですよ。だから今小学校 5 年と 3 年といますけど、金はないけどまあまあ幸せという感じで。だから普通の家庭の子どもと、やっぱりちょっと違いますよね。

光さんの妹さんも毎日、テレビの時間になると光さんに電話掛けて。一番末の女の子って、ふつう違うじゃないですか。それがすごく私はお母さんがすごいなあって思うんですよ。家族全体で光さんを軸にして暮らしている。けっこう障害を持ったお子さんのいる人で離婚する人多いんですよ。要するにご主人が放っておかれるわけですよ。だから大江さんはとってもいいお父さんだと思いますね。

私は最初、田舎から出てきたミーハーだったから東大生が小説を書くということに珍しさをもって読んでたんですよ。あんまり分からなかったけど。それが『個人的な体験』から、共感がすごく生まれてきて、「ア、そういうことだな」、みたいないところがありましたね。だからサイン会で“共生”って書いてもらったの。私は大江さんの政治的な事とかっていうよりも、父親として、家庭のなかの大江さんにすごくいい人だなあみたいな感じがありますよね。

**タカコ:** 息子さんの障害が分かった時点と、『個人的な体験』を読んだ時点というのは、どちらか先だったんですか？

**真春:** 光さんの方が 4 つくらい上なんですよ。

**タカコ:** 先に『個人的な体験』を読んで？

**真春:** いや、後だと思いますね。息子が生まれて本なんか読む余裕はなかったですからね。

**いとう:** 娘さんが結婚して 5 年くらいかかったというお話がありましたけど、それは 5 年間くらい娘さんが旦那さんとなかなか上手くいかなかっ

## 座談会

たということがあるんですか？

**真春:** やっぱり娘なりにずっとどうして私が生まれてきたんだろうみたいなのを考えたりのりで、精神的に混乱していたと思うんですよね。それで父親と母親は、自分から見ると戦っているわけですよね、毎日。だから結婚式の時も「うちの母親は戦う母でした」みたいな(笑) 事を手紙に読まれて。

**いとう:** 息子さんのために日々戦っているっていう。

**真春:** そうですね、学校でもそんなこと言われたりして。今でこそアスペルガー症候群って言いますが、何だか分からなかったんですよね。自閉症とはちょっと違うんですよね、何でも喋るし、頭も悪くないし。だから余計、やりにくくて。娘なんかも、私が苦しんでいるから自分は何かに役に立とうと一生懸命にしてきたみたい。

**タカコ:** 5年間で、安心して愛されたんじゃないですか。

**真春:** そうですね、気持ちが普通に戻ったって言ってましたね。なかなか素直になれなかったのが。



**つる:** 母親になるってなかなか大変な事ですよ。たまたま妊娠して子ども産んで母親にはなるけど、避妊して産まないって

いう方法もあるわけじゃないですか。だから、若ければ別ですけど、ちょっと歳いってる人は母親になるかならないかという選択は結構なかなか難しい。

**タカコ:** いやあ、よく考えたらできないですよ。私は行き当たりばったりだから、生まれちゃったから育てたけど、よく考えたら、今のましてこの時代によく考えて子ども産むのはすごい勇気

だなあと。

**真春:** 大江さんところはゆかりさんが一本動かないものをきっちり持つてるから周りがしっかりこうなんかね、大江さんも徹子の部屋なんか出るとね、とってもいいお父さんでニコニコしていますよね。

## 性表現

**タカコ:** すごく大江さんて民主主義の人というか女性に対して蔑視の気持ちがない人ですよ。ゆかりさんの事も一個の人間として尊敬しているし尊重しているし。その相手の女性を尊重するっていうところが色んなところに表れていると思うんです。上手く伝わるかどうか、ちょっとアレなんだけれども、性的な事の表現も過激でしょう？大江さんて。

**つる:** そうですね。

**タカコ:** びっくりするような表現がありますよね。すごく女性が率直に要望を述べたりするのって…あるかな～！？って

**つる:** ヤリますか？みたいな(笑)

**yoshimi:** 元気を出してヤッテみよう！みたいなね。

**つる:** そうそう！(笑) 私もそれは言ってみたくらいとか思うんだけど(笑)

**ちやまん:** タカちゃんとか。

**yoshimi:** まり恵さんも。

**タカコ:** 宗教施設に入ったら息抜きしないとおじさんの部屋に忍び込んだりみたいなの…それって女性が、自立している女性として描かれているから、その性表現がそういう風にハッキリ過激であるし、その現実にあるか／ないかってことは置いておいて、問題じゃないと思うんで

## 座談会

すけど、そこに大江さんの女性に対する尊厳を見てるっていうのをすごく私感じるんです。

**真春:**この前私の友達がね、大江さんと村上春樹はね、性に対する表現がね、しょっちゅう出てくるって。

**つる:**重要な問題ですからねえ。

**真春:**それがね、やだなあって言うんですよ。でも大江さんの本を読んで卑猥な気持ちになんかなる人いないと思う私は。

**タカコ:**全然エロティックじゃないですよ。

**真春:**だからねえ、渡辺淳一と読み比べてごらんって言ったのネ。違うでしょう？

**一同:** (笑)

**イオ:**でも、エロティックであること自体はある時期、大江さんは志向してたでしょ？

**タカコ:**えっ、大江さん？

**イオ:**秋山さんって評論家との対談で、初期の頃だろうと思うけど、70年くらいに出た本だから、まだ大江さんと江藤さんが仲良かった頃のも、ある時江藤さんに、どうです私の新作は、エロティックでしょとか言われて、うーんとかって批判されたとか何とか。

**ちゃまん:**あの頃はそうですね。ヘンリー・ミラーとか。

**イオ:**完全にエロティックであるってのは狙ってた。

**いとう:**それはエロを狙っていたというよりは、そこを過激に書くことで、衝撃的にするということじゃないですか。

**イオ:**でも、アングルの裸婦だってさ、娯楽とし

ての裸婦だしアートとしての裸婦だしさ、エロティックっていうのは目標じゃん、ひとつ。

**タカコ:**それは間違いないと思う。

**イオ:**ある時期に大江さんはエロティックでいって、思ってたんじゃないのかなあ

**つる:**若い時期の作品はセックスが非常に大きいものとして扱われていたのは確かですよ。

**タカコ:**でもセックスは書いているけど、でもエロティックな表現をしてみるんじゃなく、セックスを通じてもっと人間の根源的な事を書こうとしていると思う。



**イオ:**あの初期の、『芽むしり仔撃ち』のなかで「私のお腹を見てもいいよ」ってある少女が言う、っていうシーンはエロティック

じゃないかな。

しかも、少年にとってはあれが初恋の人だ的に描かれているわけじゃん。ダフニスとクロエ？思春期の少年の、多少性的なところも含めた恋、当然エロティックな側面も持つし。

だから一時期それで競い合ってた、その辺を開拓するっていうのはむしろ若い作家としてはあったのでは。石原さんも相当アレじゃん、何か若さの性的爆発、じゃないけど。あの時期、時期が時期だったか。

**タカコ:**性表現をハッキリ書くこと自体がすごく新しい感じじゃないですか、あの時期。だけどそのチャレンジしたかったことは全く質が違いますよね、石原慎太郎と大江さんでは。石原慎太郎呼び捨てで(笑)大江さんはさん付けですけど。

女性のファッションと肉体



**yoshimi**: もう戻しますね。(笑) つるさんから、大江さんの登場人物の女性のファッションについてyoshimiさんまとめられます？っていうメールをいただいたんです。パラパラと読み返したんですよ。でも具体的にファッションについてどうこうっていう描写があまりないんです。

**つる**: そう、思っていたよりないんですね。

**yoshimi**: で、わたしは『人生の親戚』が一番好きなので読み返して、まり恵さんのファッションをいくつか具体的に表現しているところがあるんですが、時代性もあるんだと思いますが、非常にコンサバティブな感じがするんですね、大江さんが描く女性のファッションは。例えばひまわり柄のワンピースとかね。

**イオ**: コンサバティブってどういう意味？

**yoshimi**: 保守的、全然冒険はしないというような意味ね。それとかプリーツスカートが2回出てくるんですね。それと麦わら帽子。いま麦わら帽子かぶってひまわり柄のワンピース、そんな人いるか？みたいな。(笑)でも時代がそういう時代だったから。

**イオ**: これいつだったけ？

**タカコ**: 大学生くらいにあたしそんな格好してましたよ。ひまわりじゃないけど。

**いとう**: 描かれている時代は 70 年代くらいじゃ

ないですか。座り込み、ハンガーストライキとかやりましたよね。

**つる**: 韓国の詩人の…。

**いとう**: 金芝河(キム・ジハ)。



**yoshimi**: それくらいの時代に見たものを描いているという、大江さん自体がその頃に体験した流行というか。倉木まり恵さん

という人はこの時代にしてはかなり前衛的な女性なんですけれど、わたしとか今の人から見たら真っ赤な口紅なんて塗ってる人いないんですよ、でもその時代はそうだったと思うんです。そういう意味で大江さんが好きなファッションというよりは、その時代の象徴的なものを投影しているんじゃないかなという気がしました。

**イオ**: まり恵さんという人は、いいとこのお嬢さんなんだよね。

**つる**: すごくお金持ちのお家の人ですよ。

**yoshimi**: 私がこの『人生の親戚』のファッションとして好きなのは、まり恵さんがいつもハイヒールを履いているというのが大好きで。大江さんが女性の靴に焦点を絞ってくれたということ自体、これは女を知ってるなという気がするんですね。私自身、自分のファッションの中で靴がすごく好きなんです。ハイヒールも履きたいほうで。

**真春**: 『イン・ハー・シューズ』観ました？

**yoshimi**: 観ましたあ！ ああいう心理って女性に絶対ありますよね。靴に対する愛着というか、自分を鼓舞するために靴をはくみたい、戦闘服じゃなくて戦闘シューズみたい。勝負靴。そういうのがあるみたい。

それでこの『人生の親戚』でのハイヒールという

## 座談会

のが私の中では印象に残っていて、集会所でのまり恵さんについてMさんが話す部分がすごく好きなんです。「丸太のポーチを踏む踵の音を覚えているわ。ここではみんなモカシンの靴なのに、あの人だけはずっとハイヒールだったし」っていうところがあるんですね。それって農作業をしながら鶏小屋に行ったりするのに、みんなインディアンが履くような一枚皮のぺったんこの靴なのに、まり恵さんだけはハイヒールを履いていたのよっていう M さんの表現があるんですけども、ここがまり恵さんっていう人がどういう女性だったのかということを一言で表しているような気がして、とっても好きな描写でした。

**イオ:** 男子はハイヒールとかあまりイメージが湧かない…。

**いとう:** 女性がわかっているからハイヒールということではなくて、女性的なもののシンボルとしてハイヒールがあるんですよ、男の目から見て。スカートだとか髪飾りとか男から見ての女性性のシンボルとして、都会的なおしゃれをする女性のシンボルとしての一つとしてハイヒールがあると思いますけどね。

**タカコ:** どんな靴を選ぶかということが、いろんなものを表しますよね。いろんなものが見えてきちゃいますよね。

**yoshimi:** ありますよね。

**いとう:** 実際はハイヒールといってもいろいろな種類があるんだと思うんですけど、細かく見れば。僕もそうですが、たぶん大江さんも、ぜんぶひっくるめてひとつのハイヒールとしか思ってなくて、具体的にどんなの？といわれると、いやそれはわからないという感じだと思うんですよ。

**yoshimi:** ジミーチュウとかじゃないんだ。(笑)

**真春:** ジミーチュウを履くと人生変わるっていいですよ。

**イオ:** それはブランド？

**つる:** そうそう。

**イオ:** 大江さんはハイヒールのブランドの固有名までは出してそれで何かを象徴させるまではないんだよね。

**タカコ:** わりとがっちりした人がお好きですよ。

**つる:** わりと大柄な。

**タカコ:** まあ、お好きかどうかはわかりませんが。(笑)

**真春:** ローズさんもそうですね

**つる:** そう、そしてスタイルはラブじゃないんですよ。きちんとしていてスカートなの必ず。

**yoshimi:** そう、脇役の人はジーパンの女性とかパンタロンとかを履いている。主役級の人は必ずスカート。それもエレガント系というか、タイトな感じではなくて、ふわっとしたスカートをはいている。

**イオ:** でも『洪水』の伊奈子はジーパンじゃなかった？

**yoshimi:** あのね、若い人はジーパンなの。若さ＝ジーパン。(笑)

**つる:** それは言えてる。

**yoshimi:** お尻がパンと張っているとか太ももがぱりっとしているとか、そういうのがジーパンにあっているんじゃないんでしょうかね。

**イオ:** どこかの作品に、イーヨーの妹が趣味いいファッションをしているのに対して、日本の女性がお洒落をしても男性が反応しないという一節があったじゃん。

## 座談会

**いとう:**『燃えあがる緑の木』?

**イオ:**じゃあ、サッチャン?

**yoshimi:** 読書会で、サッチャンが生理用品をバスから投げるといような場面に、「こんなことはふつう女性はしないよね」って女性から非難轟々でしたけど、あれも(両性具有の)サッチャンだからということだったのかもしれないね。

**いとう:**お尻の描写も多いですね。

**タカコ:**イギリスパンとかね。

**いとう:**特に最近なのかなあ。『水死』にもちょっと出てきました。

**タカコ:**さっきの性的な描写で言えば、『取り替え子』の最後のほうにある…

**yoshimi:** ああ、浦ちゃん? キスでいっちゃうみたいなの?(笑)

**タカコ:**これ自分の経験で書いたのか、それとも伊丹十三とかに教えられていたことを書いたのか。ご自分の経験ではないと思うし、想像力だけでこんなにリアルに書けるだろうかって。あれはものすごくエロティックなシーンだと思った。どうですか? 男性としてはリアリティありますか?

**いとう:** いやあ、ちょっとわからないですね。もうちょっと10年くらいしたら境地がわかるかもしれない。確かにエロティックだなと思いますけど。

**真春:** 私は千櫨と浦さんの会話がすごく好きで、きちんと子どもを産んでサポートする。そのときの会話のシーンがすごくいいなと思う。

**いとう:** いいけれども、あそこは僕はリアリティがない感じがしたんですね。

**真春:** 自分もお母さんも、梅子さんも、もう誰も産んであげられないからっていう。

**いとう:** それでもドイツまで行って世話をするっていう話ですよ。

**真春:** 光さんもほうっておいて。

**いとう:** それはどうかなあ。

**タカコ:** でも、それでないと次の話に繋がらないから、仕掛けとして必要だったのかな。

### 最後に、好きな女性登場人物を



**つる:** 語りつくしてはいないと思いますが、一人一人登場人物の中で、好きな人をあげてなぜかということを書いて話していただいてシメにしたいと思います。

**イオ:** 女性登場人物が好きというように考えたことがない、渾然一体となって誰かわからなくなっているところもあるから、誰というのが難しい。スヌーピーさんならギー兄さんっていうのがあるけど、俺の中ではああいうアプローチはないんだよね。

アサさんが好きだけど、どの作品がどうってわからない。車に乗っているのが好きというのはある。ああいう女性の描き方、だいたい女性は運転が下手というのがあるけれど、アサさんはうまいんだろうなと思う。

**真春:** あたしもアサさんがすごく好き。世間話に用がない人で、思ったことは最後まで言う、実務的で生活に根ざした知恵がある。そこにすごく惹かれて、私にもそういう知恵があったらなと

## 座談会

思います。切り返しもうまいし、頭の回転も速そうだし、でも世間話はあまりしないし、すごく素敵だなと思いましたね。

**つる:**アサさんが素敵なのは、一方に世間話や噂話が大好きという女性の一般的イメージがあるからなんだよね。

**イオ:**実際好きだろうとつくづく思うけどなあ。女性ばかりの職場だから、おばさんってどうしてお喋り好きなんだろうって心底思うよ。

**タカコ:**私は特に誰が好きっていうのはないんだけど、おかあさん。わたしのおばあちゃんはこんな厳しさはないけれど、ズバっと真実を突く言葉を吐く人だったんですよね。よくおばあちゃんに預けられてたら、寝る前によくお話をしてくれた。大江さんのおばあちゃんとかおかあさんのことが近く感じる。厳しさと優しさがあって、真実を見抜く目もあるし、家業を引き継いで大江さんを大学にやったり、とてもしっかりした女性。

**つる:**かなり厳しいよね。小説に出てくるおかあさんって。小説に対しての評価も。

**イオ:**一番手厳しい、手ごわい女性という役割を与えられている。

**つる:**ちゃまんさん、いかがですか。

**ちゃまん:**そうですね、女性ということであえて焦点をあてたことはないんですが、やっぱり火見子。自己犠牲的なあり方で、かつ火見子自体にも魅力があった。

**イオ:**火見子とキーコって同じなんだっけ？

**ちゃまん:**設定的には後日談みたいな形になっているけど、そんなにキャラとしてかぶらない。こんなに落ちぶれちゃったのかっていう。

**つる:**火見子さんを映像化するとどういう人だと

思います。芸能人で言えばみたいなこと聞いていいですか？

**ちゃまん:**現実感がないのが火見子なので、浮かばないですね、顔とか。

**つる:**美人ですか？相当。(笑)

**ちゃまん:**桃井かおりとか。

**真春:**その線かも。

**つる:**わたしは『人生の親戚』が好きなので、やはりまり恵さんが好きなんです。ちょっとできすぎの感もあるのですが、読むたびに励まされたりすることはある。苦しみに押しつぶされないで前進していく強さ、そして物事を具体的に解決していく知性もあり周囲の人に影響を与え、人にもたれかからず歩いていく強さがある。いつも読むのが好きな本なんです。

でも彼女がガンであることを隠してみんなのために尽くして働いて、最後は死んでしまうというのは未だにちょっと納得はできない。そこに込められた意味というのはわかるんですけど、やっぱり生きなきゃダメっていう気持ちはすごくあります。

**イオ:**生き抜いてほしかった？快復したほうが良かった？ガンを乗り越えて。

**つる:**別に奇跡を望んでいるわけではなく、普通に治療して生きる可能性もあっていいんじゃないかと。

**タカコ:**逆に、許される自殺というか、自殺じゃないけど、許される死っていうか。そういうふうを受け入れたかったとしたら、無理がないっていうか、がんばって生きなくてもいい。

**yoshimi:**私もまり恵さんが一番好きなんです。最後のところで、病気になるんだけど手術を受けないでっていうところがあるじゃないですか。

## 座談会

それは、洋服のサイズも変わらずに傷をつけずに向こう側に行きたいっていう、あれがすごい好きで。

まり恵さんはめちゃくちゃ孤独なはずじゃないですか、でも表に見せず、ちょっと年下のボーイフレンドもいて、みんなにも慕われて、でも自分の本当の内面は見せないで、つらぬいていく強さに私は感銘を受けていて、私は倉木まり恵さんは自分のちょっと年上のお友だちくらいに思っているんですね。でももう向こうにいつか行った人なんだけど、という感じがあって。いつもファッションのスタイルとかも見習っている部分もあって、生き方に自分を重ねあわせたいな

と思っているところもすごくあります。年齢の時々にもまた読み返して、会話をまり恵さんとしながら生きていきたいなと思う好きな小説です。



**つる:**『人生の親戚』は女の人が好きな作品ですよ

**真春:**まり恵さんの強さ、優しさは子供二人を亡

くしたその贖罪の気持ちが根底にあるからあんな生き方ができるんじゃないかと思う。大江さんの作品の中では一番素敵な女性よね。

**つる:**いとうさん最後になりますが、どうですか。

**いとう:**僕は火見子なんですけども。いい話の後で恐縮なんですけど、小説読むときには女性を自分のパートナーだったら、恋人だっただと思って見るんですよ。そういうところからいうと、火見子はいつ行っても受け入れてくれる。そして知的で自立した魅力もある。なおかつ、最後に、バードと一緒にアフリカに行くって言ったじゃないのという弱さもある。そこも魅力的。まり恵さんはそういうことは言わないでしょう。男から見ると、最後にはどこかに独りで行ってしまう人よりは、自分に甘えてくれる人のほうがいい。

**つる:**これでみなさん、終わりにしてよろしいでしょうか。大江さんの小説は面白くて、いろいろ言い出すと語りつくせないですよ。大江さんの作品について話していると、色々なことに派生してきて切りがないんです。それが面白いと思います。(終わり)



# 読者は語る

## シ ジャズ、文学、革命

中学三年の春でした。学校の図書館の司書の方に頼んでベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)に参加しました。やさしい大人の人たちの集まりでした。6月になりました。70年安保闘争がありました。公園に新左翼やら、なにやら、よくわからない集団がおおぜい集まりました。初めてデモというものに参加しました。先輩に言われて黒いノンセクトを現すヘルメットをかぶり、サングラスをして、口にはタオルを巻きました。友人たちと、ジャズ喫茶に行くようになりました。中に入るととても暗く、フォーク、ロックに比べ、よくわからない難しい音楽でした。それをひたすら聞きました。70年安保闘争が終わって、ぼくは初めて大江健三郎という作家の『われらの時代』という本を書店で手に取りました。とてもわかりやすい小説でした。ジャズ、文学、革命、その三つが入ったものでした。日本のビート・ジェネレーションのようでした。水のように自然に自分の中に入り、そして大きく深い共鳴が喚起されました。その存在はとてつもない大きなショックでもありました。その力がぼくを動かしました。ぼくは転がる石となって、転がり続けています。ボブ・ディランが歌うように。



金田善裕(かねだ よしひろ) 物書き/編集者

## 「洪 水はわが魂に及び」

私には「アスペルガー症候群」の息子が居ります。「個人的な体験」以来の光さんと思われる人物が登場する小説を読む時、父親の姿勢「共生」に励まされてきました。核避難所として作られた建物に、自己放棄し鯨と樹木の代理人「大木勇魚」となり5歳の息子「ジン」を連れて隠遁する決断を私は尊敬します。息子の対人関係が上手いかず、自分も傷つき、相手にも嫌な思いをさせて苦しむ姿を見る時、「ジン」が新しい環境の内側に深く順応できた避難所に、私達親子も籠る事が出来たらと想像しました。外出する時の用心や方向を変えることに抵抗する「ジン」に対する父親の対応は私と同じで深く共感しました。ジンの密閉された意識には自分以外の者を通せる筈がないと思ひ込み、守護する為にだけ生きていた勇魚は私と同じです。けれど、ジンをきれいな子、と感銘を表し、水疱瘡に苦しむ時、看病する伊奈子と受け入れるジンには、自分がいなくてもこの世界に適応していけると思わせる姿がありました。親なきあと、子がどのようにして生きていくのかを考える時、勇魚が伊奈子を信じジンを託す最終章は私にとっては希望です。



>その冬が終わろうとして、なお巻きかえしの雪が降った日、この表現に魅了されます。

中村順子(真春)

## 私 という大江読者の作り方

「取り替え子」の中で吾良が「労作(トラヴァーユ)は作家のやることで、読者がやらされるものじゃない」と古義人を批判する場面がある。今では大江さんの「追っかけ」と家族に揶揄される私だけれど、私は「労作」をやらされているのだろうか？

私が最初に読んだ大江作品は「取り替え子」だった。読み終わると同時に私はもう一度最初から読み直したが、筋がわからなかった訳ではない。今までに受けたことのない感銘に、何が自分をこんなにも揺さぶるのか、確かめずにはいられなかったのである。ストーリーの魅力だけではなく、各章、短い会話にいたるまで無駄な言葉がない。2回目の読書はさらに細部の深さに圧倒された。私の場合は小説中に言及されている過去の作品も未読であったし、フリーダ・カーロの絵もモーリス・センダックの絵本もすぐには浮かばなかったもので、それらを認識した上での3回目の読書はさらに充実したものとなった。これらを「労作」したと言ってもらえるなら、「労作」こそ大江さんから読者に与えられた「読むこと」を「生きること」にまで変えてくれる大江ワールドへの入り口ではないか。



それから大江読者となるために「大江健三郎再発見」の年表をたよりに私は初期の作品から読み始めた。読み進んでいくと、後の作品中に過去の作品についての言及が出てくることや、大江さん自信が作品について語られているのを読んでさらに読書の喜びが増す。小森陽一さんの「歴史認識と小説」にある「産まれたばかりの大江小説の新しい読者」はまさに私だった。「取り替え子」という小説の魅力に引きつけられ「大江作品の小説群を読破する旅」を始めたのだ。

大江さんが「師匠」(パトロン)と呼ばれるような人物と出会うことは難しいけれど、私たち大江読者は本を開くことで大江さんを「師匠」にすることが出来る。小説のみならずたくさんのエッセイやノートや評論でいつでも「師匠」に触れることが出来る。その「師匠」の語られることをより深く自分のものにするために他の作家の作品を読んだり音楽を聴いたり、大江読者は幸せな「労作」をし「読む人間」として「自分にとっての本のネットワーク」を構築し、苦しいことも多い現実の人生に力を与えられている。

タカコ



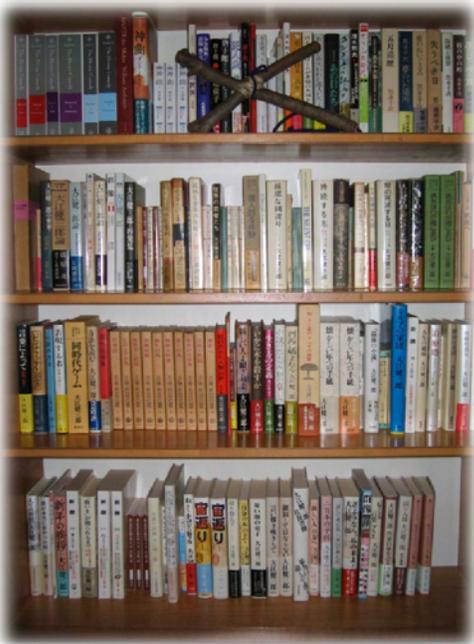
# コラム：大江さんと哲学

内外の多くの哲学者と親交のある大江さんだが、哲学について自ら書かれ又語ることは少ない。この小文の目的は大江さんの著作を巡りながら大江さんと哲学の関連を考えるものである。



まずサルトルから始めることに異議を持つ方はいないだろう。しかし初期エッセイ集の『厳粛な綱渡り』を読む限りでは、文学者・行動者としてのサルトルについてのみが多く語られている。「第三部のためのノート」には「ぼくの文学的バック・グラウンドは、サルトルとN・メイラーと、そして日本の戦後文学という三つの拠点にはさまれている三角地だった」(155 ページ)とある。

数年間以上にわたって一人の著作を読み続ける習慣を持つ大江さんはこの習慣として二人の哲学者の著書を読んでいたはずである。それはプラトンとスピノザである。手元の本をいろいろ確認したが、プラトンについての記述のある著作を見つけることが今回は出来なかった。私の記憶によれば、ウィリアム・ブレイクと関連で深く調査していたネオ・プラトニズムから遡るようにしてプラトンにたどり着き、かなりの長期間集中していたはずである。スピノザについては明確である。『大江健三郎小説』(全十巻)の月報をまとめた『私という小説家の作り方』に示されている。「不信仰者としての軽薄を自覚しないのではないが、ともかくスピノザの『神』の定義に、自分をもっとも自由にし、かつさらなる深化を夢みさせるものを感じていた。そこでこの思想家とその研究書を読むだけのために、残り時間を使いたいとねがったのだった。そこで私は一九九四年初めそれを開始した。」(202 ページ)。



『燃え上がる緑の木』三部作とプラトンのイデア論を重ね、『宙返り』以降の作品にスピノザの影響をみる誘惑に駆られるが、それにはもっと本格的な考察が必要である。

どうやらこの試みは失敗に終わったようだ。しかし大江さんが自己の考えを深めるために多くの哲学者の著作を読まれているだろうということは想像できる。その中にはアンリ・ベルクソンやジル・ドゥールズらのフランス哲学者もいることだろう。講演の主題でなくともピックスに彼らの名前が出ないかと密かに期待をして待とう。

HAL

# 私の愛する大江作品

## 「鳥」

1974年、高校の国語の教科書に掲載されていた『鳥』との衝撃的な出会いと感動、それは、将来において大学の卒論で大江健三郎論を書く決意をさせるほどの影響力を持っていました。その後、40代で卒業した修士課程の論文も大江作品論でした。研究とまで呼ぶには恐れ多いのですが、それは50代になった今でも続いています。『鳥』との出会いは、私の人生の軌跡と深く関わっています。これをお読みになる時は過去のことになると思いますが、来台を心待ちにしております。

小林由紀

「鳥」:『見るまえに跳べ』所収



## 『人生の親戚』

寂しいのに暖かく、暖かいのに孤独な物語。女性の視点がかここまで開かれるのを見て、納得し、作者に嫉妬しました。この本を2回目に読み直したのは、死の床にあった父を40日間毎日病院に見舞い、祈りながら、見守りながらでした。

加藤佑子

## 『芽むしり仔撃ち』

豊穡なる大江文学を語るにおいて、その主題、切り口には事欠かないでしょう。しかし分析的な知識も知能も持ち得なかった大学生の私を痺れさせたのは、何よりもその鋭利な文体でした。中でも、少年たちの漏らす「ああ」という嘆息。声にならぬ声。会話文としてはあまりに短いこの2文字に、私はすっかり参ってしまったのでした。

印南直樹



## 私の愛する大江作品

「セヴンティーン」:『性的人間』所収



「セヴンティーン」

17歳。勉強もスポーツもまるでダメ。家にも学校にも居場所が無い。部屋でオナニーするしか能が無い。<<殺してやりたい、機関銃でどいつもこいつも、みな殺しにしてやりたい、ああ、おれに機関銃があったらなあ！>> 自意識の毒にやられた少年に起こる「奇蹟」。40年前に書かれた作品とはいえ、現代の若者にも充分通じるところがあると思います。

チャイ

『「救い主」が殴られるまで  
燃えあがる緑の木 第一部』

大江作品のひとつひとつは、その装丁とともに心に深くしみ入るものですが、何よりわたし自身を打ち抜いたことばは、「私は魂のことをしたいと思います」という、いまのギー兄さんのことばです。この「魂のこと」という言い方、「したい」という願望に心底うたれてしまいました。このことばは「信仰を持たない者の祈り」とともに、わたしを励まし時には修正してくれることばです。祈らずにはおれない今の世の中で、大江文学はそれこそ「魂のこと」を「している」と思うのです。

松永 節



『懐かしい年への手紙』

どうやら僕にとってはこの作品が大江作品全体の基軸となっていて、その後のどの作品を読んでもつい「懐かしい年」の内容やシーンを思い浮かべながら読んでしまいます。最近では「癒し」という言葉が氾濫していますが、現代ではストレスから逃げることさえできればそこそこの生活を送れてしまいます。しかしそのようなありふれた回避の「癒し」ではなく、ひたすら何かを希求する飢えのようなモノがあって、その先にこそ真に自分の得る癒しがあるのではないのでしょうか。そういう気持ちを常に自分に意識させてくれる作品です。

じん



## 私の愛する大江作品

### 『万延元年のフットボール』

私が人生の困難に立ちすくんだ時に必ず本箱から取り出す作品、そして読了後必ず再度歩いていこうと励まされるもの。その個所はつど違う、あの時点での「明治百年」の総括であり 1960 年代としての「現代」に深い部分で切り込んだ作品だからであると思う。次に励まされるのはいつだろうか？

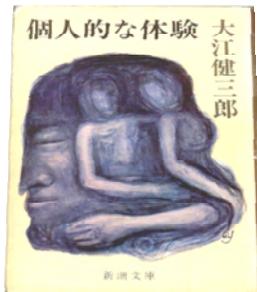
HAL



### 『個人的な体験』

自分が大江文学に入り込むきっかけとなった作品です。文章の細部に至るまで独創的で、かつ無駄がなく、まるで作品全体が一つの美術品。議論のあるハッピーエンド的ラストも含め、傑作だと思います。

いとうくにお



### 『空の怪物アグイー』

この作品集には、私が《大江表現》と勝手に名付けている大江さん独自の比喩が溢れています。これらの比喩は、普段見えているようでいて本当には見えていない多くの物を、初めて見るような驚きとともに見せてくれました。優れた比喩は、それだけで新しい世界を開示し、感性を蘇生させる力があることが実感できる 1 冊です。

ちゃまん



## 私の愛する大江作品



### 『「新しい人」の方へ』

何より大切なのが個人の普遍性だ、社会科学徒として到達した私の結論です。自身およびとりまく人々の生を描き続ける大江さんの作品全体には「個人の再生」がテーマに貫いていてとても魅力的です。最近この本で「なにより難しい対立のなかにある二つの間に、本当の和解をもたらす人」としての「新しい人」の指摘に会い深く感銘しました。まだ理論化されていない普遍的命題および焦眉の課題を見出したからです。私自身も大いに勇気づけられました。

榎本里司

### 『人生の親戚』

今年の夏、世田谷美術館でフリーダ・カーロの「メダリオンを着けた自画像」を観てあなたが好きな画家だったとあなたの事が偲ばれました。あなたが逝ってからもう20年にもなりますね。女性として潔く自分のスタイルを貫いたあなたの在り方は今でも私の人生のお手本よ。でもあなたの亡くなった年齢を私は随分と超えてしまったわ。そちらでもやっぱりハイヒール今でも履いているのですね。いつかあなたに会う時が来たら新色のディオールの口紅をお土産に持って行くわね。

倉木まり恵 様



yoshimi



# ファンクラブ活動報告

一年の活動内容を報告するページですが、今回は創刊号なので、立ち上げから現在までの歩みを年表形式で振り返ってみます。(いとうくにお)

1995	11月2日	インターネットに「大江健三郎ファン倶楽部」を立ち上げる。掲示板を設けるが、投稿は稀であった。
1996		サイトの情報を少しずつ増やす。
1997		サイトの情報を少しずつ増やす。
1998		掲示板の投稿が徐々に増える。
1999	8月6日	新宿のアジアンキッチンにて『宙返り』刊行記念オフ。ホームページで呼びかけに8名が集まる。どういことなるか不安もあったが、盛り上がり翌朝まで語り明かすことに。
	10月9日	『宙返り』読書会オフ。参加者のお宅を借りて12名が集合。NHK制作の「響きあう父と子」も鑑賞。
	12月10日	成城学園駅前の成城飯店にて、忘年会”排骨湯麺とペプシコーラ”オフ。参加者9名。成城での開催ということで大江さんをお誘いしたものの、渡独のため参加不可。代わりということで『日本現代のユマニスト渡辺一夫を読む』をゆかり夫人よりいただく。
	12月28日	ホームページをASAHI-netからDTIに移動。同時に、e-groups上にメーリングリスト開設。
2000	2月12日	参加者宅にて、小説に登場するオックステイルシチューを再現しての食事会。7名が参加。『静かな生活』に登場する映画「スターカー」も観賞。
	4月2日	飯田橋にて花見。愛媛から取り寄せた「銀河鉄道」（『宙返り』に登場する酒）を堪能。12名が参加。
	6月18日	TAC30周年記念講演オフ（大江さんの通っていた東京アスレティッククラブの30周年を記念して津田ホールで開催された講演会に数名で参加）。撮影会があり、参加者は皆、大江さん一緒に写真を撮らせてもらう。
	7月1日・2日	府中青年の家にて一泊二日の読書会を開催（課題図書は『個人的体験』）。十数名が参加。参加者による大江光さんの曲の演奏、大江さん出演のテレビ番組のビデオ鑑賞、武満徹の歌の合唱なども。
	9月23日	成城学園駅南口にあるマダムチャンホームキッチン（『静かな生活』に登場する張夫人飯店のモデルと思われる）にてカオヤーズ・オフ。14名が参加。
2001	1月13日	『取り替え子』の読書会と新年会を兼ね、池袋にてチェンジリング・オフ（新年会）。14名が参加。
	4月7日	飯田橋にて銀河鉄道オフ。7名が参加。参加者によるオリジナル曲の生演奏も。
	7月14日	新宿にて『「自分の木」の下で』の読書会。
	9月22日	おしゃべりオフ。特にテーマは設けず自由に歓談。参加者は10名。

2002	1月19日	新年会オフ(「言い難き嘆きもて」「鎖国してはならない」読書会)。参加者は10名。
	3月30日	世田谷文学館見学と花見オフ。世田谷文学館には、大江さんの手書き原稿なども。花見は蘆花公園にて。参加者は5名。
	11月9日	その後の読書会会場として定着する早稲田奉仕園にて『憂い顔の童子』読書会。参加者は6名。
2003	1月18日	早稲田奉仕園にて新年会を兼ねて『人生の親戚』読書会。映画『静かな生活』のビデオ鑑賞も。参加者は6名。
	12月6日	早稲田奉仕園にて『「新しい人」の方へ』読書会。その後、忘年会。参加者16名。
2004	1月31日	東京都現代美術館にて舟越桂氏の「二百年の子供 挿画展」を鑑賞後、新橋の喜山飯店にて新年会兼読書会。
	11月13日	早稲田奉仕園にて『懐かしい年への手紙』読書会。参加者は15名。愛媛のOさんから「一六タルト」の差し入れ。
2005	1月29日	神奈川近代文学館にて『「話して考える」と「書いて考える」』読書会。12名が参加。その後、おさ亭に移動し、鴨鍋をつつきつつ新年会。
	11月20日	早稲田奉仕園にて『さようなら、私の本よ!』読書会。参加者は13名。
2006	1月22日	早稲田奉仕園にて『万延元年のフットボール』読書会。参加者15名。夜は新年会。
	8月26日	早稲田奉仕園にて『燃えあがる緑の木』読書会。3部作全部を通してだったので、午前10時から夕方5時までかけての長時間の会に。参加者11名。
	12月17日	早稲田奉仕園にて『芽むしり 仔撃ち』読書会。参加者12名。Yさんが皆にジュンク堂の「大江健三郎書店」のしおりと手書き原稿のコピーをプレゼント。夜は忘年会。
2007	2月24日	早稲田奉仕園にて『「伝える言葉」プラス』読書会。参加者10名。夜は、遅い新年会。
	5月18日	東大での講演「知識人になるために」を3名が聴講。また、夜の第1回大江健三郎賞記念対談(講談社)に参加した方も。
	5月19日	早稲田奉仕園にて『新しい人よ眼ざめよ』読書会。参加者10名。
	8月4日	早稲田奉仕園にて『死者の奢り・飼育』読書会。参加者10名。
	9月29日	早稲田奉仕園にて『読む人間』読書会。参加者8名。
	11月11日	大江さんの創作活動50周年を記念して何かやろうということで、有志12名で手紙を書き、それを製本して大江さんに送付。15日に大江さんからサイン本が届く。
	11月23日	50周年企画で大江さんから本をいただいたことを祝い、紀伊国屋地下の「庄屋」にて祝賀会開催。7名が参加。
	12月10日	『臆たしアナベル・ライ総毛立ちつ身まかりつ』刊行記念講演会(紀伊国屋ホール)に数名で参加。夜は、「庄屋」にて打ち上げ。
	12月15日	早稲田奉仕園にて『臆たしアナベル・ライ総毛立ちつ身まかりつ』読書会。参加者10名。夜は忘年会。

2008	2月2日	早稲田奉仕園にて『日常生活の冒険』読書会。参加者9名。夜は新年会。
	3月17日	アクティブなメンバーだったサーチさんが急性心不全で逝去。後日、掲示板・メーリングリストでのサーチさんの発言集をご遺族に送付。
	4月26日	早稲田奉仕園にて『洪水はわが魂に及び』読書会。参加者は8名。昨年50周年記念で制作した「手紙」に続いて今年も何かやろうということで始まった映像作品(最終的には「Rejoice!」というタイトルに)のクランクイン。
	5月8日	第2回大江健三郎賞記念対談(講談社)に数名が参加。
	10月14日	「Rejoice!」を大江さんに送付。後日、大江さんからは電話とハガキでご返事をいただく。
	12月20日	早稲田奉仕園にて『みずから我が涙をぬぐいたまう日』読書会。参加者は9名。「Rejoice!」の上映会も実施。
2009	1月31日	早稲田奉仕園にて「茱萸の木の教え・序」読書会。参加者は6名。夜は高田馬場「ヴィノブル・カフェ」にて新年会。大江さんの誕生日なので、そのためのケーキを用意し、皆で祝う。
	4月	大江健三郎ファンクラブ通信を制作することが決定。
	5月9日	第3回大江健三郎賞記念対談(講談社)に数名が参加。Yさん、Sさんが大江さんと受賞者の安藤礼二氏とに花束を渡す。
	5月30日	早稲田奉仕園にて『「雨の木」を聴く女たち』読書会。参加者は10名。
	12月19日	早稲田奉仕園にて本誌のための座談会。夜、忘年会。



# 編集後記

人生はほとんど曇り空の下にあるという、それでも重い雲の合い間から時々輝くような陽射しが差し込む時がある。その時にその下に駆け出しっぱいの陽射しを浴びれば、人はまた生きていける。撮影はとても孤独な作業、文庫本を持って都内のアチコチを独り歩いた。そんな時の私の陽射しは大江さんとファンクラブの仲間を想うことだった。「通信」では多くの仲間の笑顔を撮ることができた。そしてその向うには大江さんの笑顔が見える。(yoshimi)

<座談会を終えて>座談会中の「性表現」では大江さんの性表現がエロティックであるかどうかで意見が割れた。女性たちはエロティックではない、ポルノではないという意見が大勢を占めたので、わたしは言いそびれたことがある。わたしにとって大江さんの小説は、充分ポルノの役割を果たしていた時期があるということ。それもまた優れた小説であると思う理由にもなっているのだが。わたしも大江さんも若かったということだ。(つる)

創刊号の編集に「名ばかり」委員としてではあるが、かかわれたことを光栄に思う。寄与度のうすさも含めてまぎれもなくそこには2009年の私がいる。(HAL)

微力ながら関わることができ、とてもうれしく思っております。(江)

本から本へのつながりをたどっていくと、その脈絡が重なり色濃くなっている場所がある。それが「萃点(すいてん)」。大江さんがインタビューでこう語っていた。僕らについていえば、間違いなく大江さんの存在が「萃点」ということになる。本のつながりだけでなく、人のつながりという意味でも。そこから広がる脈絡の豊かさに感謝したい。(いとうくにお)

## 大江健三郎ファンクラブ通信 第1号

編集長 いとうくにお

編集委員 HAL、つる、yoshimi、スヌーピー、長江

撮影/アートディレクション yoshimi

発行者 いとうくにお (kunio-i@ops.dti.ne.jp)

発行日 2010年1月31日